データベースとしての古典文学――家族、人生、そして猫

（2）杉田の梅林

大沼枕山（一八一八―一八九一）
「壬寅孟春十有三日、拉子世遊杉田。時風雪大作、就農舎、看梅花。花未放。春寒殊甚、呵筆書」詩（『江山紀勝』第一集）

壬寅孟春十有三日、子世を拉きて杉田に遊ぶ。時に風雪大いに作(な)り、農舎に就きて、梅花を看る。花未だ放かず。春寒きこと殊に甚し、筆を呵(か)して書す

一蓑衝雪向山陲　一蓑(さ)　雪を衝きて　山陲(さんすい)に向かひ
忍凍尋梅也是痴　凍を忍び梅を尋ぬるは　也た是れ痴なり
縦得千林春似海　縦(ほしいまま)に　千林　春の海の似(ごと)きを得
問君何及此游奇　君に問ふ　此の游の奇なるに及ぶに何(いず)れぞ

（3）杜甫の営み

杜甫（七一二―七七〇）
七五五年冬「自京赴奉先県詠懐五百字」詩（抜粋）
　京より奉先県に赴く　詠懐　五百字

入門聞号咷　門に入りて号咷(ごうとう)を聞く
幼子飢已卒　幼子飢えて已に卒す
吾寧舎一哀　吾寧(なん)ぞ一哀を舎（お）かんや
里巷亦嗚咽　里巷も亦た嗚咽するあり
所愧為人父　愧ずる所は人の父と為り
無食致夭折　食無くして夭折を致す
豈知秋未登　豈に知らんや秋禾（しゅうか）の登(みの)れるに
貧窶有倉卒　貧窶（ひんく）には倉卒有るを

七五七年春「春望」詩
　国破山河在　国破れて山河在り
　城春草木深　城春にして草木深し
　感時花濺涙　時に感じては花にも涙を濺ぎ
　恨別鳥驚心　別れを恨んでは鳥にも心を驚かす
　烽火連三月　烽火三月に連なり
　家書抵万金　家書万金に抵（あ）たる
　白頭掻更短　白頭掻けば更に短く
　渾欲不勝簪　渾て簪に勝へざらんと欲す

七五七年春「憶幼子」詩

驥子春猶隔　驥子（きし）は春に猶お隔たり
鶯歌暖正繁　鶯歌　暖かくして正に繁し
別離驚節換　別離　節の換わるに驚き
聡慧与誰論　聡慧　誰と与（とも）にか論ぜん
澗水空山道　澗水　空山の道
柴門老樹村　柴門　老樹の村
憶渠愁只睡　渠（かれ）を憶いて　愁いて只だ睡り
炙背俯晴軒　背を炙りて晴軒に俯す

七五七年夏「述懐一首」（抜粋）

寄書問三川　書を寄せて三川に問う
不知家在否　知らず　家在るや否やを
比聞同罹禍　比（このご）ろ聞く　同じく禍に罹（かか）りて
殺戮到雞狗　殺戮は雞狗に到ると
山中漏茅屋　山中の漏茅屋
誰復依戸牖　誰か復（ま）た戸牖（こゆう）に依らん
摧頹蒼松根　摧頽（さいたい）す　蒼松の根
地冷骨未朽　地は冷たくして骨未だ朽ちず
幾人全性命　幾人か性命を全うせん
尽室豈相偶　室を尽くして　豈に相偶せんや
嶔岑猛虎場　嶔岑（きんしん）たる猛虎の場
鬱結廻我首　鬱結として　我が首を廻らす
自寄一封書　一封の書を寄せてより
今已十月後　今已に十月の後
反畏消息来　反りて畏る　消息の来るを
寸心亦何有　寸心　亦た何か有らん
漢運初中興　漢運　初めて中興
生平老耽酒　生平　老いて酒に耽る
沈思歓会処　沈思す　歓会の処
恐作窮独叟　恐らくは窮独の叟と作らん

七五七年秋「得家書」詩（抜粋）

去憑遊客寄　去るは遊客に憑（よ）りて寄せ
来為附家書　来るは家書を附するが為なり
今日知消息　今日　消息を知る
他郷且旧居　他郷なるも　且（か）つ旧居なり
熊児幸無恙　熊児（ゆうじ）　幸にして恙無く
驥子最憐渠　驥子（きし）　最も渠（かれ）を憐れむ

七五七年秋「北征」詩（抜粋）

況我堕胡塵　況んや我胡塵に堕ち
及帰尽華髪　帰るに及びて尽く華髪たり
経年至茅屋　年を経て茅屋に至れば
妻子衣百結　妻子　衣は百結
慟哭松声回　慟哭すれば松声回り
悲泉共幽咽　悲泉共に幽咽す
平生所嬌児　平生　嬌とする所の児
顔色白勝雪　顔色　白きこと雪に勝る
見耶背面啼　耶（ちち）を見て面を背けて啼き
垢膩脚不韝　垢膩（こうじ）脚に韝（たび）はかず
牀前両小女　牀前の両小女
補綻才過膝　補綻して才（わず）かに膝を過ぐ
海図坼波濤　海図　波濤を坼（さ）き
旧繡移曲折　旧繡　移ろいて曲折す
天呉及紫鳳　天呉及び紫鳳
顛倒在裋褐　顛倒（てんとう）して裋褐（たんかつ）に在り
老夫情懐悪　老夫情懐悪（あ）しく
嘔泄臥数日　嘔泄（おうせつ）して臥すこと数日
那無囊中帛　那（なん）ぞ囊中の帛（きぬ）の
救汝寒凜慄　汝が寒くして凜慄たるを救う無からんや
粉黛亦解苞　粉黛　亦た苞を解き
衾裯稍羅列　衾裯　稍（や）や羅列す
瘦妻面復光　瘦妻は面復た光り
痴女頭自櫛　痴女は頭自ら櫛（きすけず）る
学母無不為　母を学びて為さざる無く
暁妝随手抹　暁妝　手に随いて抹す
移時施朱鉛　時を移して朱鉛を施せば
狼藉画眉闊　狼藉として眉を画くこと闊し
生還対童稚　生還して童稚に対すれば
似欲忘飢渇　飢渇を忘れんと欲するに似たり
問事競挽鬚　事を問いて競いて鬚（ひげ）を挽（ひ）くも
誰能即嗔喝　誰か能く即ち嗔喝（しんかつ）せん
翻思在賊愁　翻りて賊に在るときの愁いを思い
甘受雑乱聒　甘んじて雑乱の聒（かまびす）しきを受く
新帰且慰意　新たに帰りて且つ意を慰む
生理焉得説　生理焉（いずくん）ぞ説くを得ん

七六〇年夏「江村」詩

清江一曲抱村流　清江一曲　村を抱きて流る
長夏江村事事幽　長夏江村　事事幽なり
自去自来梁上燕　自ら去り自ら来る　梁上の燕
相親相近水中鷗　相親しみ相近づく　水中の鷗(かもめ)
老妻画紙為棋局　老妻は紙に画きて棋局を為(つく)り
稚子敲針作釣鉤　稚子は針を敲きて釣鉤を作る
但有故人供禄米　但だ故人の禄米を供する有らば
微軀此外更何求　微軀　此の外に更に何をか求めん

（4）そして猫

北宋・彭乘『続墨客揮犀』巻一

鄱陽龔冕仲自言其祖紀、与族人同応進士挙、唱名日其家衆妖競作。牝鶏或晨鳴、犬或巾幟而行、鼠或白昼群出、至于器皿服用之物、悉自変易其常処。家人驚懼不知所為、乃召女巫徐姥者使治之。時尚寒、与姥対爐而坐、有一猫正臥其側、家人指猫謂姥曰「吾家百物皆為異、不為異者独此猫耳。」於是猫亦人立拱手而言曰「不敢。」姥大駭而去。後数日捷音至、二子皆高第矣。乃知妖異未必尽為禍也。

南宋・洪邁『夷堅志』支乙巻九

紹興中、楽平魏彦成為滁州守。全椒県結証一死囚獄案、雲県外二十里有山庵、頗幽僻、常時惟樵農往来、一僧居之、独雇村僕供薪爨之役。養一猫極馴、毎日在旁、夜則宿於床下。一犬尤可愛、俗所謂獅狗者。僧嘗遣僕買塩、際暮未反、凶盗乗虚抵其処殺僧、而包裹鉢嚢所有、出宿於外。明日入県、此犬窃随以行、遇有人相聚処、則奮而前、視盗嘻吠。盗行、又隨之、至於四五、乃泊県市、愈追逐哀鳴。市人多識庵中犬、且訝其異、共扣盗曰、「犬如有恨汝意、得非去庵中作罪過乎。」盗雖強弁、然低首如怖伏状。即与倶還庵、僧已死。時正微暑、猫守護其傍、故鼠不加害。執盗赴獄、不能一詞抵隠、遂受刑。此犬之義、甚似前志所紀無錫李大夫庵者也。蠢動含霊、皆有仏情、此又可信雲。

金・元好問『続夷堅志』巻四

天壇中岩有仙猫洞。世伝燕真人丹成、鶏犬亦升仙、而猫独不去、在洞已數百年。游人至洞前呼「仙哥」、間有応者。王屋令臨漳薛鼎臣呼之而応、親為予言。己亥夏四月、予自陽台宮将之上方。過洞前、命児子叔儀呼之。隨呼而応、声殊清遠也。因作詩云、

「仙猫声在洞中聞、憑仗児童一問君。同向燕家舐丹灶、不隨鶏犬上青雲。」